

## 「自分とは何か」を求めて生きる

学生部長 上里 一郎

入学おめでと

これから皆さんは本学で数年間学生生活を送ることになるが、大学で何をやるうというはつきりとした目的を持っていてであろうか。大学へ入学するのは手段であって目的ではないはずである。ここで「何を求め大学へ」か一寸立ち止まり沈黙考してほしい。

時間はまるで矢のように早く過ぎ去るものである。「気がついたらもう四年生になっていた、就職先をどうするか決めなければならぬが、どのような仕事をしたのかはつきりしない」と語る学生が少なくない。しかし、もう時間を取り戻すことは出来ない。否応無しに巣立つしかないということになる。

「僕って何」という小説があるが、昭和五〇年代初頭の青年の心性を見事に描き評判になり芥川賞を受賞している。主人公の大学生（皆さんと同じ新入生）が、大学で内ゲバ、同棲など、「僕とは何だろう」を求めて遍歴するさまを描いたものである。

私は、主人公と同様に皆さんに、大学で「自分探し」をお薦めしたい。自分は一体何者なのか、自分は何が出来るのかを真剣に探すことが大切だと思う。この探索がなければ、「個—アイデンティティ—の確立」は至難の業になる。

そのためには、勉強、クラブ、ボランティア活動、アルバイトなど何でもよいから積極的に、自発的に熱中してほしいと思う。本人の能動的な取り組みが無ければ、教養も知性も具備することはできないのである。

## 図書館へのいざない

附属図書館長 津留 宏道

一才半になる孫が、先ほどから無心にワープロのキーを打っている。字が現れたり、消えたり、別の字が出たりするだけのことだが、いつまでも飽きずに遊んでいる。私たちが幼児の頃は、何をして遊んでいたのだろうかふと考えた。やがて彼が小学校へ入る頃には、ワープロを現在の大人よりも上手に打てるようになってくることだろう。

図書館は情報化時代を迎えた。若者にとって現代の図書館は、大変利用しやすい仕組みになっている。自分の欲しい情報をどのようにして探るかということは、すべてボタン操作で出来る。だから、新入生諸君は入学と同時に図書館へ足を向けてゲーム機に向かうように気楽にキーを打ってみてほしい。

大学の図書館は、マンガの本や週刊誌などは置いていないが、広島大学には一学部があり、その他、研究所や研究センターなどもあって、図書館に納められた蔵書は総数二五〇万冊に及ぶ。また、種類も多岐にわたっている。それらの中には諸君の読みたい本も沢山あると思う。「自分は何を読むべきか」、そんなことは新入生諸君にはわからなくてもよい。「自分は今何を知らたいか」は、そのうちに専門の知識が入ってきて少しずつ判ってくるものだ。

とにかく図書館へ足を運んでみたまえ。そしてキーを打ってみることだ。それ以外に何ら予備知識や先入観は必要でなく、かえって邪魔になると思われる。キーを打てば何が出てくるのか、という冒険心があればよい。ぜひ君の図書館を利用してほしい。